

世界の馬鈴しょ事情(その3)

元農林水産省孺恋馬鈴しょ原原種農場長

秋元 喜弘

4. 中期的展望

(1) 供給

世界の馬鈴しょ生産は年率1.1%の割合で増加し、2000年には約3億1,200万トンに達すると見込まれており、これは1987～89年の平均収穫量2億7,500万トンよりもかなり高い数字となっている。作付面積は約1,800万ヘクタールと、実際には伸びはなく停滞しているものの、年率0.8%の単収増は生産性の向上に大きく関係している。開発途上国では先進国よりもかなり速く生産の増加の傾向がみられるであろう。すなわち2000年までの年増加率が先進国では0.3%であるのに対し、途上国では2.8%、3000万トンに達し、結果として途上国の生産量は2000年には1億500万トンに達するであろうと考えられている。



◀真正種子を用いた馬鈴しょ畑・ベトナムにて(CIP)

表4 地域別の馬鈴しょ面積、単収、生産量(1987～89年平均実績と2000年見とおし)

	1987～89年平均実績			2000年見とおし*			年成長率 1988～2000U.R.*		
	面積 1,000ha	単収 t/ha	生産量 1,000 t	面積 1,000ha	単収 t/ha	生産量 1,000 t	面積 %	単収 %	生産量 %
全 世 界	18135	15.2	274849	18429	16.8	312385	0.13	0.84	1.07
先 進 国	11885	16.8	199151	10643	19.4	206958	-0.92	1.23	0.32
北アメリカ	633	31.2	19754	645	35.4	22847	0.16	1.06	1.22
ヨーロッパ	4849	21.2	102699	4357	23.2	101255	-0.89	0.78	-0.12
ヨーロッパ共同体	1898	27.5	52250	1672	31.5	52592	-1.05	1.12	0.05
その他の地域	2951	17.4	50449	2685	18.1	48663	-0.78	0.49	-0.30
旧ソ連	6162	11.4	70273	5403	14.1	76133	-1.09	1.78	0.67
大洋州	47	28.1	1323	49	30.4	1490	0.35	0.65	1.00
その他	194	26.3	5102	189	27.7	5233	-0.22	0.43	0.21
開発途上国	6250	12.1	75698	7786	13.5	105427	1.85	0.94	2.80
アフリカ	548	7.7	4203	710	9.2	6526	2.18	1.49	3.73
ラテンアメリカ	1048	11.7	12243	1165	13.6	15891	0.89	1.29	2.20
中近東	496	19.0	9430	584	21.7	12662	1.37	1.11	2.49
極 東	4156	12.0	49815	5324	13.2	70337	2.09	0.80	2.92
その他	2	3.5	7	3	3.7	11	3.44	0.39	3.84

*2000年にウルグアイラウンド農業合意が完全に発効したとき

FAO資料

この量は世界全体の34%にも達するものであって、87～89年間の28%以下にくらべ比率が高くなっている（表4）。

1) 先進国

先進国での生産増はきわめて少ないと考えられている。すなわち年間増は0.3%、800万トンであって、増加は作付面積が年間0.9%の割合で減少しているものの、それを上まわる生産性の向上によるものと考えられているのである。

ヨーロッパをのぞいては、生産につき他の先進国とも似たような傾向にある。旧ソ連地域では国によって増減はまちまちであり、これはもっぱらそれぞれの国の単収のちがいが原因であると考えられているが、ロシア・ベラルーシ・ウクライナでは生産は増加するものと見越されている。またこれら地域では作付面積が減少傾向にあり、これは都市近郊の土壌汚染を含む主要生産地での環境の悪化が大きく影響している。東欧諸国では作付面積が全般的に減少傾向にあり、その結果として生産量は4,400万トンから4,200万トンに減少するであろうとみられているが、減少の主たる理由はポーランド・ハンガリーの事情が関係している。ここでは減少に歯止めをかけるために新しい多収性の品種が育成されているが、それらが生産者段階まで十分に普及するようになるには少なくとも5ないし8年を要するであろうから、直ちに好結果をもたらすとは期待できない。

南欧でヨーロッパ共同体に加入している国のなかには、早生・極早生品種の栽培が増えているところがあるが、これらの国々にとっては中晩生品種あるいは加工に適した品種の生産増もまた、優先されるべきであろうと考

えられる。

2) 開発途上国

2000年における開発途上地域での生産増の約2/3はアジアが占め、その半ば以上は中国とインドの増加によると見られている。すなわち両国の1,000万～1,500万トンの生産増がこれにあたる。パキスタン・インドネシア・ベトナムもまた生産増加傾向にあるが、これらの国々においては人口が増加し、また収入も増えているので、それが馬鈴しょ生産増をもたらしている大きな要因となっている。アフリカとラテンアメリカでも90年代に生産は非常に伸びてきている。北アフリカのエジプト・アルジェリア・モロッコで生産の純増がみられるほか、単収は西アフリカ、東アフリカのサハラ以南の国々で30ないし50%増が見越されている。ラテンアメリカでの生産増は作付面積増とともに生産性の向上によってもたらされているが、アンデス地方の国のなかには10年前くらいに一時大きな低下がみられたものの、それより復活しているところもあり、また北部アンデスのコロンビアでの生産はさらに向上し、南米大陸の南部地域でアルゼンチンは近隣諸国と結ばれている貿易協定により、これらへの輸出が活発に行われて大きな利益を得るであろうと注目されている。

(2) 需 要

1) 食 糧

直接食糧としての、全世界的な馬鈴しょの需要は80年代後半の1億3,800万トンから2000年の1億6,000万トンへと、年率1%増が見込まれている。途上国での食糧としての消費は年率3%増と予想されており、一方先進国では僅かに0.1%増とみられているにすぎない。人口増加を考慮に入れば、先進国では

1人あたり消費量が減少を続けると思われるが、途上国では少しずつながらも増加するであろう。アフリカでは1人あたり消費量は年間7kgと非常に低い水準にとどまっているが、この地域ではキャツサバのそれは1人あたり106kgと、いも類のなかでもっとも重要なものとなっており、一部の国ではヤムの消費量が多い。そうではあっても馬鈴しょは、ここ10～15年間食糧供給がときには危機的状況にあったルワンダ・ウガンダ・エチオピアなどの東部・中央アフリカの人口密度の高い主要生産国において、次第に重要な食物となってきた。

同様に、極東においては1人あたり消費量の伸びはそれほど大きくはないと見られてはいるものの、たとえばバングラデシュ・インド・ネパールなどで年間のある時期に穀物の代替として用いられるなど、馬鈴しょは大切

な主食として消費が拡大してゆくと考えられる。また馬鈴しょはアミノ酸・ビタミンCを豊富に含むので、これら栄養素の給源としての役割は見のがすことはできないであろうし、国によっては農村地域での、日々必要とされるビタミンCの15%は馬鈴しょがその給源となっている。そのうえ、作付面積の増加によって農村での雇用の拡大が期待でき、また収穫後の貯蔵・輸送・加工など種々の取扱いの仕事が増えることは、南アジアで土地を所有していない多くの人たちに収入の途を与えることになる。これらの人々はこのような仕事が必要ならば、食糧を入手することができないのである。

現在先進国・途上国双方とも馬鈴しょ加工業は急速に成長し、またその一層の成長が望まれている。世間一般の傾向として簡便に食事が用意でき、またファーストフードが提供

表5 地域別の馬鈴しょ需要（1987～89年平均実績と2000年見とおし）

	需 要 計			食 糧			飼 料			1人あたり食糧消費量			成 長 率 (1987～89)～2000UR **			
	1987～89	2000*	2000UR**	1987～89	2000*	2000UR**	1987～89	2000*	2000UR**	1987～89	2000*	2000UR**	需要計	食 糧	飼 料	1人あたり消費量
	1,000,000 t									kg/年			%			
全 世 界	278.8	309.9	312.5	137.9	160.2	161.5	63.7	65.1	65.7	27.0	25.6	25.8	0.96	1.32	0.25	-0.37
先 進 国	202.3	204.4	205.7	91.1	93.5	94.1	52.1	48.6	48.9	73.7	71.1	71.5	0.14	0.27	-0.53	-0.25
北アメリカ	19.8	22.0	22.0	15.3	16.7	16.7	0.8	0.8	0.8	56.3	56.7	56.7	0.89	0.72	-0.00	0.06
ヨーロッパ	102.7	98.1	99.7	41.5	39.7	40.3	31.6	26.3	26.7	84.3	77.6	78.8	-0.25	-0.23	-1.38	-0.56
ヨーロッパ共同体	52.3	49.1	49.6	29.2	28.5	28.8	11.1	7.1	7.2	85.5	81.5	82.2	-0.45	-0.13	-3.57	-0.33
その他の地域	50.4	49.0	50.1	12.2	11.2	11.4	20.4	19.2	19.6	81.6	69.2	70.7	-0.04	-0.56	-0.34	-1.19
旧ソ連	73.0	76.8	76.6	28.7	30.8	30.7	19.5	21.0	20.9	100.6	100.0	99.7	0.40	0.57	0.59	-0.07
大洋州	1.3	1.5	1.5	1.1	1.3	1.3	0.1	0.1	0.1	56.6	56.2	56.2	0.97	1.07	-0.16	-0.06
その他	5.5	5.9	6.0	4.5	4.9	5.0	0.2	0.2	0.2	27.7	27.8	27.9	0.72	0.89	-1.28	0.06
開 発 途 上 国	76.5	105.4	106.8	46.8	66.7	67.5	11.6	16.5	16.7	12.1	13.5	13.7	2.82	3.09	3.10	1.02
アフリカ	4.4	6.6	6.6	3.4	5.2	5.3	0.0	0.1	0.1	6.9	7.3	7.4	3.41	3.74	6.84	0.53
ラテンアメリカ	12.5	16.3	16.5	9.6	13.0	13.1	0.4	0.5	0.5	22.4	24.2	24.4	2.35	2.61	2.43	0.72
中近東	9.3	12.4	12.4	7.4	9.9	9.9	0.4	0.3	0.3	27.8	27.0	27.1	2.49	2.50	-1.62	-0.20
極 東	50.3	70.1	71.2	26.4	38.5	39.1	10.8	15.6	15.9	9.8	11.6	11.8	2.94	3.33	3.25	1.54
その他	n	n	n	n	n	n	n	n	n	3.7	4.2	4.2	3.90	3.17	0.00	1.06

*2000年における基本計画
n=最少

**2000年にウルグアイラウンド合意が完全に発効したとき

FAO資料

されることを期待しており、それによってとくに都市部では馬鈴しょを用いるこれら加工業・外食産業に相当の利益がもたらされるであろうと考えられている。途上国のなかではとくにトルコ・中国・インド・インドネシア・ベトナムなどアジアの国々で加工業の伸びが予想されているが、これらの国では都市部の人口が多く、1人あたりの収入が増え、旅行関係業が栄え、ために馬鈴しょ加工品の市場として強い関心がもたれている。同様エジプト・モロッコなどの北アフリカでも加工業がさかんになりつつあり、またメキシコ、南米大陸南部のアルゼンチン・ブラジルでも近年中に加工業が興ってくるものと思われる。

2) 飼 料

家畜飼料として現在全世界で6,400万トンが用いられているが、2000年には若干減少するとみられている。飼料に加工するための経費が上昇するであろうし、他の飼料価格とくに穀物との競合に影響されるためであって、先進国では年々0.5%ずつ減少してゆくとみられ、とくに東欧でそれがいちじるしく、2000年での使用量は4,900万トンと考えられる。途上国では飼料は馬鈴しょ利用のほんの一部にすぎないが、年率3%の増加が見込まれる。中国の場合には生産物の輸送が思うに任せず、流通が阻害されることが多いが、家畜を多数飼養している地方では他地方から送られてくる飼料に頼らずとも、その地で生産される馬鈴しょを用いることによって問題を解決することができる（表5）。

(3) 貿 易

ガット・ウルグアイラウンド合意の関与をのぞけば、2000年には世界の馬鈴しょ貿易量はおおまかにいってヨーロッパ共同体（EC12

カ国）内での貿易を含めて1,300万トンに増加するものと見込まれている。

またEC間貿易をのぞけば世界の馬鈴しょおよび馬鈴しょ加工品の純貿易量は年率2.5%増加して800万トンに達するであろうと考えられる。

ウルグアイラウンド農業合意の結果が完全に実施される場合を考慮したときには世界の純貿易量は年間ほぼ6%増となり800万トンよりも多い1,100万トンに達するであろう。生鮮馬鈴しょとその加工品についての低い輸入関税によって、世界の馬鈴しょ市場の規模は大きくなることが予想される。

馬鈴しょを輸出することによって大きな利益を得ている地域は北アメリカ・西ヨーロッパ・中近東であるが、東欧・旧ソ連地域では国内の経済問題にわざわざされて馬鈴しょ産業が発展しないことと、その産業を支える適切な政策を欠いていることが原因で輸出量は増加することなく、むしろ減少の傾向をたどることになる。さらにたとえばポーランドのように、補助的な支払いを廃止したことによって加工品、主としてでん粉・アルコール輸出の有利性がなくなってしまったところもある。

開発途上国でもまた、馬鈴しょとその加工品の貿易に次第に関心が高まってきており、途上国からの生鮮馬鈴しょ・種馬鈴しょの輸出はこの30年間で200%も増加しているが、そのうえ2000年にはその輸出量を2倍以上にしようとする期待がかけられている。たとえばアルゼンチン・チリ・コロンビア・中国、インドネシア・エジプト等の国々は貿易の拡大に非常な関心をもっており、また地理的条件がそのようにするために恵まれている。

表6 地域別の馬鈴しょ貿易量（1987～89年平均実績と2000年見とおし）

	輸 入					輸 出				
	1987 ～89	2000		成 長 率		1987 ～89	2000		成 長 率	
		B*	UR**	(1987 ～89)～B*	(1987 ～89)～UR**		B*	UR**	(1987 ～89)～B*	(1987 ～89)～UR**
		1,000 t		%			1,000 t		%	
全 世 界	5701	7702	11022	2.54	5.65	4427	7810	10914	4.84	7.81
先 進 国	4346	5445	8484	1.90	5.73	3891	6602	9712	4.50	7.92
北アメリカ	—	—	—	—	—	289	796	837	8.81	9.27
ヨーロッパ	3330	3431	7199	0.25	6.64	3577	5701	8803	3.96	7.79
ヨーロッパ共同体	2579	2380	3332	-0.67	2.16	2841	4606	6365	4.11	6.95
その他の地域	751	1051	3867	2.84	14.63	736	1095	2438	3.37	10.50
旧ソ連	609	1200	476	5.81	-2.03	—	—	—	—	—
大洋州	28	20	17	-2.76	-4.07	9	—	—	—	—
その他	379	794	792	6.36	6.33	16	105	72	16.97	13.35
開発途上国	1355	2257	2538	4.34	5.37	536	1208	1202	7.01	6.96
アフリカ	266	232	250	-1.13	-0.52	45	164	159	11.38	11.09
ラテンアメリカ	209	744	709	11.16	10.72	17	167	132	20.97	18.63
中近東	266	503	344	5.45	2.17	347	743	567	6.55	4.18
極 東	597	751	1208	1.93	6.05	127	134	344	0.45	8.66
その他	17	27	27	3.93	3.93	—	—	—	—	—

域内貿易量をのぞく

*2000年における基本計画

**2000年にウルグアイラウンド合意が完全に発効したとき

FAO資料

輸入については、ウルグアイラウンド合意の結果として先進国・途上国双方とも相当に拡大することが見込まれる。イタリア・スペイン・イギリスを含むヨーロッパでは輸入量が増えることが予想され、また日本も馬鈴しょについての成長市場になると考えられている。このように先進国での輸入量の予想は800万トンに達するが、これと対照的に旧ソ連・大洋州地域ではとくに自給を目指すことに影響されてか、輸入量は減少している。途上国では、自国での生産量の不足分を補うための輸入がとくにインド・ネパール・パキスタンなどのアジアの国々と、ブラジル・メキシコを含むラテンアメリカで増える見とおしである。収入の増加と食生活の変化に刺激されて加工品の輸入がより増えるであろうと考えられている（表6）。

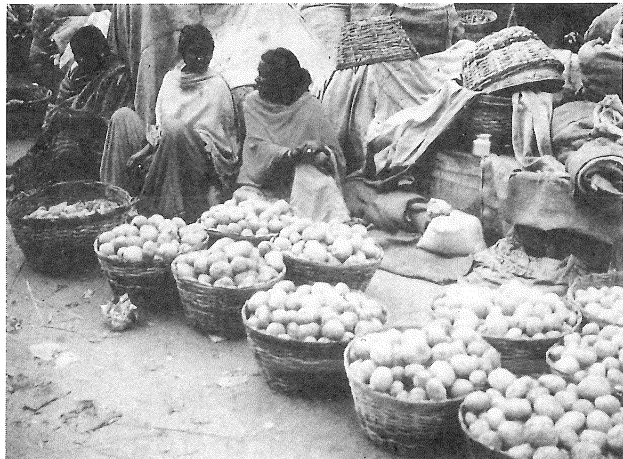
5. 今後の留意事項

世界食糧需給のうえから、馬鈴しょ

のもつすぐれた特性、能力がこれから先十二分に発揮できるようにするため、政策立案者・研究者・企業の責任者などはいろいろの事柄に気を配らなければならないが、これらには生産、市場流通と利用などが含まれており、その概要については次に示すとおりである。

(1) 病害対策

メキシコに初発生した疫病菌の新系統は現在北米・西欧の生産地にまん延しており、依



▲収穫された馬鈴しょ・インドにて（FAO）

然として先進国・途上国双方にとって生産上の大きな脅威となっている。壊滅的な被害をおよぼすこの病害は現今の“馬鈴しょ飢餓”のような災害が発生する前に抑えこまなければならない。

これを達成するため、財政面・技術面で先進国・途上国が共同で力を合わせ事に当ることが強く望まれる。このような計画を協同して行うにあたっては、専門的な知識と、特定作物について広い地域にわたっての横の研究・情報網をもっている現存の国際機関が関与することにより、理想的に達成されるものと期待されている。

(2) 環境保全

化学肥料・農薬などの過剰な使用、加工に際して出される廃液、土壌流亡、森林破壊などによる環境の悪化に対しては、生産に焦点を合わせたものも含めての、適切な技術の運用と、環境保全に適合した天然資源利用計画の発展普及をはかることによって抑制しなければならない。

これらには先進国・途上国とも科学の発達に力を入れ、普及活動をはかり、それに馬鈴しょの生産・加工を生業としている人たちに過度の負担をかけないような、環境保護のための適切な政策とが必要とされる。

環境保全に適合した生産と利用に関する技術が新たに開発されているが、世界的にいまでも増加を続ける人口を支える基盤としての役割を果たすことができる馬鈴しょ増産は、これら技術の進歩によって可能であろう。

(3) 馬鈴しょに対する評価

この30年間で生産量と単収の増加にもかかわらず、馬鈴しょの重要性がいぜんとして低く見られているのは、多くの途上国におけ

る政策立案にその原因があるとされているものの、とくに近年世界各地で都市化が加速しつつあり、そこでの消費が急増しているので、馬鈴しょの相対的に低い地位は改善されてきている。

馬鈴しょについての政策は、生産だけでなく収穫物に関すること、たとえば加工・貯蔵・市場での取扱いなどについて強く推し進めなければならないが、現在行われている多くの研究・普及は、全体的な食糧体系のなかでの馬鈴しょをとらえ、他の主要作物と関連させて一貫的な食糧政策として考えるよりは、むしろほとんどが生産面について力が入れているきらいがある。

馬鈴しょは商品としてたいへん有利に取引されるので、途上国にとっては輸出品として扱われる可能性のある、現金作物として強い関心をもたれている。

商取引の機会がより多くなることによって、そちらの方ばかり目を奪われて、馬鈴しょが、農村の住人の間におこりうるかもしれない飢餓を救うために果し得る役割を見逃すべきではないが、幸いにして多くの国においては、馬鈴しょがその双方の役割を十分に果しうる作物・食糧であることへの理解が深まりつつある。

(4) 研究の方向

馬鈴しょに関しての生産・加工・栄養・環境問題間の結びつきについての理解は、とくに途上国で深められなければならない。将来向上するに違いない生産量・単収については、多くの地域における研究がその成果を挙げることができているが、たとえば重要病害に抵抗性をもつ品種の育成、熱帯・亜熱帯での高温短日条件下でのいもの形成、低地あ

るいは高地での経済性をともなった単収増、などについては今後関心をもって研究が進められなければならない。

とくに途上地域においては、化学肥料の施用と農薬の使用を少なくしても十分な生産をあげることができる、加工適性をもった品種の導入は急を要することであり、その開発に大きな期待がもたれている。

現在加工品の品質基準は相当に厳しいが、もしそれが若干緩められるように修正されれば、環境条件の改善には都合のよいことである。これによって、環境の中に流し出される有害な化学物質の量を減らすのに有効だからである（注：たとえばやや暗色となる加工品をきれいな色に仕上げるために用いる薬品等を使わずに済む、など）。

アジア・アフリカ・ラテンアメリカでの、2000年あるいはそれより先における加工馬鈴しょ市場規模拡大の可能性は、これらの問題をうまく解決できるかどうかにかかっていると思われる。

6. 要 約

(1) 世界の馬鈴しょ生産量は87～89年間の平均2億7,500万トンから90年代末の3億1,200万トンに増加するであろう。しかし開発途上国にくらべて先進国での生産・消費の様相は大へん異っている。とくにヨーロッパでの生産増加傾向はきわめてゆるやかであり、世界的な生産量のなかで先進国の占める割合がひきつづき低下してゆくものと考えられている。

それに対して途上国では90年代末の生産量が3,000万トンも増加するという急速な伸びが見込まれるが、これにより2000年には途上

地域で全世界の34%にあたる1億500万トンが生産されることになろう。

(2) 先進国の生産量は87～89年の1億9,900万トンから今世紀末の2億700万トンと、わずかながら増加する見とおしである。

先進国での84%を占めるヨーロッパの多くの国、旧ソ連地域では作付面積の減退がみられるものの、ひきつづき生産が行われている。生鮮食糧品としての需要の落ちこみと、家畜飼料としての用途の減少がみられるが、フレンチフライなどのファーストフード、チップなどのスナックへの需要が増加していること、また生鮮品・種いも・加工品の輸出が伸びていることによって従来からの消費形態の減退をある程度埋め合わせてきているのである。

(3) 途上地域での生産量の80%はアジアでのものであるが、最近の生産増のなかでもこの地域はもっとも大きな割合を占めているのである。

途上地域では供給と需要双方で増加がみられてきたが、供給面からみるとアジアで穀物を基礎とする作物生産体系に組み入れるのによく適合しており、需要面からみると消費者の食事の形態がコメまたはコムギを主体にしたものから多様なものへと移りかわり、そのために馬鈴しょの消費が増加したのである。加えて、控え目にみても他の主食品とくらべて馬鈴しょの価格が安くなってきたことが消費を刺激し、供給を増加させる引き金ともなっている。

これら多くの要因のために途上国で2000年の生産量が増加するであろうと見込まれているのである。

病害抵抗性をもった品種の育成、あるいは真正種子の応用などの新しい生産技術は、

高価な農薬・種いもなどの生産資材を多用している生産者の負担を減らすことになろうし、急速な都市化と加工業の勃興もまた生産を伸ばす一つの要因となるであろう。

(4) 80年代に発生した疫病菌の新しい系統は90年代には北米・ヨーロッパの主要馬鈴しょ生産地域にまん延している。

この菌は世界の生産増加への大きな障害となるであろう。化学肥料・農薬を過度に使用する結果としてもたらされる環境の悪化については、温帯熱帯双方の生産地域でその対策を十分検討しなければならない。とくに馬鈴しょがこれから先もその特性・能力を十分に発揮して生産力が高まるうえからもこのことは必要である。

(5) 世界の馬鈴しょ生産のうち、直接人類の食糧にされるものは50～60%で、およそ4分の1は家畜飼料となり、他のおよそ10%は種いも用であり、残余は工業用または減耗である。

(6) 食品加工は、世界の馬鈴しょ産業界のなかで、もっとも成長のいちじるしい分野である。

現在米国で生産されるものの半分は加工に用いられ、また西欧でも急速に成長している現状であり、東欧・旧ソ連地域でも馬鈴しょ産業振興の端緒としての加工業に注目が集まっている。

多くの途上国でも急速な発展がみられており、とくにアルゼンチン・コロンビア・中国・エジプトにおいてそうである。家畜飼料としての需要はヨーロッパ、とくに東欧・旧ソ連でひきつづき減退している。

(7) 生鮮品の貿易は過去3年平均で年間約750万トンであり、これは全世界生産量の3

%にあたる。

うち輸出入の約3/4はヨーロッパ共同体12カ国間のものであるから、これ以外の地域では少ない。

しかしながら、途上国での急速な都市化と加工業への認識の高まりとが一層の需要をひきおこすことになり、結果として世界貿易が拡大することになる。アジア・アフリカ・ラテンアメリカでの収入増と食習慣の変化が、ファーストフード・スナックへの需要の伸びを刺激することになるであろう。

(8) 2000年にむけての見とおしとしては、世界の純貿易は年率2%で増加して1,300万トンに達するであろう。ヨーロッパ共同体間の貿易を除外すれば比率はこれよりも高く、年率2.5%で800万トンとなろう。ウルグアイラウンド農業合意が完全に発効したときのことを考慮すると、ヨーロッパ共同体間のものを除いても年率6%の増加をみて1,100万トンに達するであろう。

であるから、生鮮馬鈴しょおよび加工品の関税が低くなることによって、世界の馬鈴しょ市場の規模は大きくなるであろうと期待される。(完)

〈投稿をお待ちします〉

●当財団では、いも類振興に関する皆さまからのご寄稿をお待ちしています。いもの作付・育成から食事法、さらには地域での楽しい催事まで、氏名・住所・職業を明記のうえ、巾広い範囲でのご参加を待っています。

●原稿は700字～1200字です。採用分には、当財団の定めによる薄謝を呈します。ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

●宛て先は、東京都港区赤坂6-10-41
(財) いも類振興会・情報編集部です。